

【研究報告】

COVID-19流行下における成人看護学実習学内代替実習プログラムの評価

伊藤 加奈子, 唐津 ふさ

北海道医療大学看護福祉学部看護学科

要旨

成人看護学実習の学内代替実習において、プログラムを通して学生が得た学びの評価を目的とし調査を実施した。A大学看護学科3年生17名に対しGoogle forms[®]による無記名式アンケートを行い（回収率47.1%）、記述統計と自由記述の質的分析を行った。結果、【情報の多様さ】【模擬患者の存在】【多角的な視点からの視聴覚教材】【プログラムの積み上げ】【看護過程の展開に則った実習プログラム展開】【自身の計画・実施に基づいた振り返り】が学びに役立っていた。また、プログラムを通して【カルテ以外の情報が個別的な計画には重要となる】【患者理解を深めるためには能動的に動く必要がある】【変化を追いながらその時々状態を捉え援助を考える必要がある】【今後を予測して観察点や援助を考える必要がある】【振り返り評価することの重要性】【個性に沿った支援を行う看護師の役割や責任】を学んでいた。一部学生の評価だが一定の学びが得られ、今後の教授方法への応用が示唆された。

キーワード

COVID-19, 成人看護学実習, 学内実習プログラム, 評価

I. 緒言

看護学実習は、学生が学修した知識・技術・態度を統合、深化し、検証することを通して、実践へ適用する能力を習得する授業である。多様な場で多様な人を対象として援助することを通して、学生が対象者との関係形成を中核とし、多職種連携における能力、思考力や問題解決能力、高い倫理観と自己の在り方を省察する能力を身に付けることを目的の一部としている（大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会、2020）。

2020年、世界的な新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19と略す）の流行により多くの看護系大学において臨地実習が中止となり、従来実習で求められる目的を達成する事が難しい状況に陥った。2020年4月から7月までに看護系大学全体の74.1%が臨地での実習ができず（日本看護系大学協議会、2020）、対面によるリアルな体験から学びを得る機会の確保が難しい状況にあったことがわかる。

A大学においても4年次前期成人看護学実習はZoomを用いた遠隔実習により事例展開を行ったが、その中で学生にリアリティのある体験をもたせる事が難しく、学生の理解度を高めることに限界を感じていた。そのような中、3年次後期成人看護学実習の一部学生において臨地実習が中止になり、前期と違い対面での学内実習が可能な状況において、臨地実習が実施でき

た学生との学びの差をできるだけ埋めることができるように急遽学内代替実習プログラムを作成することとなった。対面ではあるが、シミュレーションモデルの不足など環境が整わない中での検討であり、かつこれまでに臨地実習を学内実習に代替するような状況は無く、参考となる文献も見当たらなかった。学内代替実習プログラム検討にあたり、実際の患者を見て理解する体験ができないため、学生が事例患者の状況をイメージする事が難しいことが予測された。前期の実習経験からイメージ化の難しさが学生の学びの深度に影響するのではないかと危惧していたため、学生のイメージ化を促すようなプログラムを検討し実施した。

これらの学内代替実習を終え、実施により得られた学生の学びについてプログラム全体を評価した。その評価のうち、今回は臨地実習に近づけられるよう工夫したプログラムについて焦点をあて、その工夫により得られた学びの内容を明らかにし、今後の教授方法における課題について示唆を得ることを本研究の目的とする。

II. 方法

1. 研究対象

A大学看護学科第3学年時における成人看護学実習科目を履修する2018年度入学生116名のうち、臨地実習中止に伴い対面による学内代替実習を行うこととなった17名とした。

2. 学内代替実習プログラムの主な内容

A大学第3学年時における成人看護学実習の科目で

<連絡先>

伊藤 加奈子

北海道医療大学看護福祉学部看護学科

は、従来4週間の実習期間内で1名以上の患者を担当し、オレムのセルフケア不足理論を用いて看護過程を展開している。今回の実習では、従来学内で行っている演習との差別化を図り、より実習における実践に近い体験を踏めるようなプログラムとすることを意識し、内容を検討した。具体的には、術前から退院までの経過において、①様々な情報源から意図的に必要な情報を探し出すこと、②経時的に患者情報が追加され状態が変化していくこと、③患者の状態をイメージできるようにモデル人形や映像、インタビューによる視覚的情報を用いること、④学生が立案した計画や看護実践をその都度振り返り評価することを体験できることを目指しプログラムした。

今回の実習では実習期間を10日間に短縮し、誌上の事例を元に看護過程を展開するプログラムとした。具体的な内容は、①a. 擬似カルテ、b. 模擬患者へのインタビュー、c. 術後モデル人形を用いた観察、d. 動画視聴を通じた“情報収集”、②a. 術後3日目・6日目の行動計画立案と振り返り、b. 看護過程の展開、c. 退院指導計画の立案・実施・評価、d. レポート課題を通じた“実施と評価”を組み合わせた構成とした。全学生が同じ事例を元に、個人ワークとグループワーク、ロールプレイを行いながら、オレムのセルフケア不足理論を用いて各自看護過程を展開した。実習プログラムの詳細については、他誌を参照されたい(伊藤・熊谷・唐津, 2021)。

3. データ収集期間

2020年12月25日～12月28日にアンケートの回答を求めた。

4. データ収集方法

Google forms[®]を利用した無記名式アンケートで行い、自由意思による回答とした。

5. 調査内容

以下の内容について、回答を求めた。

- 1) それぞれの実習プログラムが学習に役立ったか否か(5段階)、実習目標の達成に役立ったプログラム、実習目標達成度(4段階)、実習の満足度(4段階)、患者のイメージ化に繋がったプログラムについて、選択肢からの回答を求めた。
- 2) 複数の情報源や情報が変化する中から情報収集する体験からの学び、援助計画の立案・実施の体験を通じた学び、振り返りの学習を通じた学びについて、上記1)の選択肢を選択した理由について、自由記述による回答を求めた。

6. 分析方法

選択式質問の回答は記述統計を行い、自由記述につ

いては類似する内容を研究者間で検討し、質的記述的に分析を行った。

III. 倫理的配慮

本研究は、研究者の所属施設の倫理委員会(承認番号20N032039)による承認を得て実施した。対象者に対しては、実習最終日に文書と口頭で研究内容について、以下の通り説明を行った。①研究目的と意義、②研究方法、③Google forms[®]回答の際には無記名かつメールアドレスを収集しないため個人の特がされないこと、④回答は自由意思に基づき参加・不参加による成績への影響はないこと、⑤アンケートへの回答をもって研究同意を得たとみなすこと、⑥データは鍵付きのロッカーで厳重に管理すること、⑦結果は看護系学会で発表、論文として公表すること、⑧個人の特ができないため回答後の同意撤回ができないことについて説明した。

IV. 結果

1. 実習プログラム全体に対する学生アンケート結果

研究依頼した学生17名中、8名から回答が得られた(回収率47.1%)。

半数以上の学生が、全てのプログラムが看護過程の学習に「大変役だった」又は「まあまあ役立った」と答えた。実習目標の達成に役立ったと考える実習プログラムを問う質問では、目標「立案した看護計画に基づき援助を実施するプロセスを理解できる」については「術後モデル人形を用いた観察」を選択した学生が半数以下であったが、その他のプログラムについては半数以上の学生が役立ったと回答した。

目標達成度については全員が「よくできた」又は「だいたいできた」を選択し、代替実習に対する満足度については「だいたいできた」が半数以上を占めていた。患者の状況をイメージすることに繋がった実習プログラムについては、半数以上の学生が全てのプログラムを選択した。

2. 各実習プログラムに対する学生の自由記述に関する分析

14の質問項目に関連する自由記述内容について、分析を行った。

全ての質問項目から65のコードを抽出し、意味内容を比較検討して「学習する上で役立った内容」と「プログラムを通して得られた学び」に分類した。更に内容が類似するものを集めて分類し、最終的に「学習する上で役立った内容」6個のカテゴリー、「実習プログラムを通して得られた学び」6個のカテゴリーに分類した。以下、コードは< >、サブカテゴリーは<< >>、カテゴリーは【 】で表す。

1) 学習する上で役立つ内容 (表1)

(1) 多角的な視点から得られる情報の分析・解釈

①情報の多様さ

擬似カルテ・動画視聴・インタビューは、<自分が着目した情報へのアクセスのしやすさがあった>ことや<様々な情報源の中から着目した情報を意図的に探し出せた>こと、<直接聞くことで自分が着目した情報をすぐに得られた>など、<<着目した情報へのアクセスのしやすさ>>という点で学習する上で役立っていた。また<沢山の情報からアセスメントに必要な情報が何かを考えられた><自分で捉えた患者の状況や背景を元にどのような援助や退院指導内容が必要かを考えられた>など、何が必要な情報かを考え整理していく中で<<複数の系統立てた情報提示>>を受けたことが学習する上で役立っていた。この<<複数の系統立てた情報提示>>の中で多様な情報を分析・解釈し情報とアセスメント・援助を結び付けて考える際に、<<着目した情報へのアクセスのしやすさ>>が判断材料となる情報に直ぐにアクセスし確認することに役立っていた。

更に、<情報が毎日増えることで臨場感を持てた>ことや<その人の言葉として聞くことで事例患者の言葉に現実味を持てた><より実習に近い形で情報収集したことで、現実味を持って必要な情報が何か考えて集める事ができた>など、<<リアリティのある情報>>も学習する上で役立っていた。<“臨場感”や“現実味”を持てたことは、実習を行う環境として患者情報を身近に感じることに繋がり、学生の集中度を高めていた。

これらの【情報の多様さ】が、多角的な視点から考えることに繋がり、情報の分析や解釈の際に役立っていた。

②模擬患者の存在

インタビューや退院指導の体験は、<直接聞くことで擬似カルテにない情報を得られた><その人の言葉として聞くことで情報に実感を持ってアセスメントや計画を考えることができた>など、<<直接的な模擬患者との対話>>という点で学習に役立っていた。更にインタビューや動画視聴により<会って話すことで言葉以外の感覚的な情報からも患者像を考えられた><声質や姿勢から患者の気持ちや体験が読み取れた>と感じており、患者と相互的に関わる体験や場面の視聴を通して得られた<<患者の非言語的情報>>が学習する上で役立つと感じていた。紙面上の情報だけでなく【模擬患者の存在】により相互的関わりの場面から得られる情報が、患者の人間性や状況の理解に役立ち、更には援助検討の際に役立つと感じており、多角的な視点から得られる情報の一つとして役立っていた。

(2) イメージ化の容易さ

「学習する上で役立つ内容」の中で多く出てきたキーワードは、“イメージ化”に関する事柄であった。

身体状況や生活面・心理面に関する【多角的な視点からの視聴覚教材】から様々な情報を得つつ、それらの情報が日々変化の中で患者状況の変化や変化に伴う患者体験の理解を深めるような【プログラムの積み上げ】を体験したことが、疾患や病気を抱える患者を身体的・精神的・心理的・社会的にイメージすることに役立っていた。

①多角的な視点からの視聴覚教材

<実際に見た事がない術後患者の状態を見ることができた><術後モデルを見たことで処置内容など術後の状態を具体的にイメージできた><処置と必要性・重要性とを結びつけてケアを考えられた>など、<<視聴覚教材による身体状況の提示>>が“身体状況のイメージ化”の上で学習に役立っていた。身体状況のイメージ化が促進されたことにより、具体的な援助まで関連付けて考えることにも繋がっていた。

また<会話をすることで思い・希望など患者像のイメージが考えやすかった><インタビューや動画から患者の過去の生活状況や生活背景・思い・希望を知れた>など、<<生活面・心理面に関する視聴覚教材>>は患者の“生活背景や思いのイメージ化”に役立っていた。

②プログラムの積み上げ

<擬似カルテによって日々の患者の状態を細かくチェックできた><その時々々の患者の状況を文字以外の感覚的な情報で得られたことで患者の状況をよりイメージしやすかった>など、検査値・症状などの身体面の変化や患者の反応・思いなどの心理面の変化を確認できたことが、学習する上で役立っていた。これらは<様々な情報源・方法により情報を得たことで患者のおかれている状況・背景を想像しやすかった>こととも関連しており、これらの<<状況が変化する事例展開>>により患者の理解が積み上がったことが“その時々々の患者の様子・状態・状況のイメージ化”に役立っていた。

また、<術後モデルを見た事で患者の体験をイメージしやすかった><術後患者の観察・動画視聴により疾患・病気が患者に及ぼす影響を身体的・精神的に考えられた><退院指導計画の立案・実施を通して疾患・病気が患者と周囲にいる人々に及ぼす影響を社会的・身体的・精神的に考えられた>など、<<患者体験の理解を深めるプログラム>>が“患者側の視点や体験のイメージ化”に役立っていた。観察や指導実施を通して患者のイメージが積み上がり理解を深められたことが、“治療による影響”や“患者の体験”まで思考を巡らせることに役立っていた。

(3) 看護過程の展開に則った実習プログラム展開

<これまでの生活・退院後の生活情報を得たことで患者の状況や背景を踏まえた援助計画を考えることが

表1 学習する上で役立つ内容

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
情報の多様さ	着目した情報へのアクセスのしやすさ	様々な情報源の中から着目した情報を意図的に探し出せた
		自分が着目した情報へのアクセスのしやすさがあった
		自分が着目した情報を得られた
		直接聞くことで自分が着目した情報をすぐに得られた
	複数の系統立てた情報提示	沢山の情報からアセスメントに必要な情報が何かを考えられた
		様々な情報源の中から様々な方法で情報を得る中で必要な情報が何かを考えることができた
		自分で捉えた患者の状況や背景を元にどのような援助や退院指導内容が必要かを考えられた
	リアリティのある情報	情報が毎日が増えることで臨場感を持てた
		その人の言葉として聞くことで情報に実感を持ってアセスメントや計画を考える事ができた
		その人の言葉として聞くことで個性について考えられた
その人の言葉として聞くことで事例患者の言葉に現実味を持てた		
模擬患者の存在	直接的な模擬患者との対話	直接聞くことで疑似カルテにない情報を得られた
		新たな情報を得ることができ看護過程の展開に役立った
		その人の言葉として聞くことで情報に実感を持ってアセスメントや計画を考える事ができた
		その人の言葉として聞くことで個性について考えられた
		その人の言葉として聞くことで事例患者の言葉に現実味を持てた
	患者の非言語的情報	会って話すことで言葉以外の感覚的な情報からも患者像を考えられた
		場面を視覚化したことでカルテにはない言葉以外の細かな雰囲気伝わった
		患者の性格を知れた
		声質や姿勢から患者の気持ちや体験が読み取れた
		文字以外の情報からも援助を考える際に必要な情報を得られた
多角的な視点からの視覚教材	視覚教材による身体状況の提示	実際に見た事がない術後患者の状態を見ることができた
		術後モデルを見たことで処置内容など術後の状態を具体的にイメージできた
		処置と必要性・重要性とを結びつけてケアを考えられた
		術後患者の観察などから患者のおかれている身体状況を知れた
		術後患者の状態を具体的にイメージできたことで患者の状態に合わせたアセスメントや援助の検討に役立った
	生活面・心理面に関する視覚教材	会話をすることで思い・希望など患者像のイメージが考えやすかった
		インタビュー・動画などからこれまでの生活や退院後の生活に関する情報を得られた
		インタビューや動画から患者の過去の生活状況や生活背景、思い・希望を知れた
プログラムの積み上げ	状況が変化する事例展開	実際に患者に指導したことで患者の様子やその場の状況などがイメージしやすかった
		文字以外の情報源からも情報を得たことで患者の概要がイメージできた
		疑似カルテによって日々の患者の状態を細かくチェックできた
		その時々患者の状況を文字以外の感覚的な情報で得られたことで患者の状況をよりイメージしやすかった
		様々な情報源・方法により情報を得たことで患者のおかれている状況・背景を想像しやすかった
		情報の中から患者のセルフケア能力をイメージできたことで援助を考えることができた
		セルフケア能力を維持・促進させるためにどのように援助を計画すると良いか考えやすかった
		数値などの変化から過去の情報も含めてその日の状態をアセスメントし患者にあった援助を考えられた
	その時々患者の思い・反応を具体的にアセスメントすることができた	
	患者体験の理解を深めるプログラム	術後モデルを見た事で患者の体験をイメージしやすかった
実習プログラム全体を通して疾患・病気の影響をイメージしやすかった		
術後患者の観察・動画視聴により疾患・病気が患者に及ぼす影響を、身体的・精神的に考えられた 退院指導計画の立案・実施を通して疾患・病気が患者と周囲にいる人々に及ぼす影響を、社会的・身体的・精神的に考えられた		
看護過程の展開に則った実習プログラム展開	課題に沿った個別的な情報の提示	看護計画や個性をどのように退院指導に組み込むと良いのか、考えることができた
		これまでの生活・退院後の生活情報を得たことで患者の状況や背景を踏まえた援助計画を考えることができた
	看護計画を元にした個別的な援助方法の検討	退院指導計画の立案を通して援助の方向性で捉えた必要な援助をより具体的に考えられた 看護計画に基づいて援助を実施するプロセスがイメージしやすかった
自身の計画・実施に基づいた振り返り	実施体験からの振り返り	自分の考えた指導計画を実施したことが実践的な学びに感じられた
		実際に退院指導を実施したことで自分の考えた援助計画が患者の状況や背景を踏まえられていたのか確認できた
		退院指導の実施体験から援助計画に基づいた援助内容や適切性について確認できた
	経過情報からの振り返り	退院指導の実施体験から援助内容の不足を確認できた
		自分の計画の不足点に気づき確認できた 自分の考えた援助計画による成果を確認できた

できた><看護計画や個別性をどのように退院指導に組み込むと良いのか考えることができた>など、《課題に沿った個別的な情報の提示》が学習する上で役立っていた。更に<退院指導計画の立案を通して援助の方向性で捉えた必要な援助をより具体的に考えられた><看護計画に基づいて援助を実施するプロセスがイメージしやすかった>など、《看護計画を元にした個別的な援助方法の検討》も学習する上で役立っていた。これらの【看護過程の展開に則った実習プログラム展開】は、生活背景や患者の状況など自分が捉えた個別性を援助や計画に反映させる過程を考える際に役立ち、一連の思考過程を辿れたことが学習する上で役立ったと感じることに繋がっていた。

(4) 自身の計画・実施に基づいた振り返り

今回の実習では、看護計画の一部として退院指導計画を立案・実施・評価することで、看護過程の全てのプロセスを体験できるようにした。教員またはインストラクターが模擬患者役を担当し、指導中に質問をするなど患者の反応をフィードバックした。学生同士によるロールプレイとは違う模擬患者の反応から、学生は緊張感を持って指導していた。この体験を通し、<実際に退院指導を実施したことで自分の考えた援助計画が患者の状況や背景を踏まえられていたのか確認できた><退院指導の実施体験から援助内容の不足を確認できた>など、援助計画の適切性について確認する上

で《実施体験からの振り返り》が学習する上で役立っていた。また、行動計画立案後の振り返りでは<自分の考えた援助計画による成果を確認できた><自分の計画の不足点に気づき確認できた>など、《経過情報からの振り返り》も看護援助の成果の確認といった点で学習する上で役立っていた。

上記の実施・評価の体験を通した振り返りは、自己の実践を内省し看護の質向上に向けた自主的な取り組みに繋がっていた。これらの点において、【自身の計画・実施に基づいた振り返り】が学習する上で役立っていた。

2) 実習プログラムを通して得られた学び (表2)

(1) 情報や情報収集が持つ意味に対する理解の広がり

複数の情報源から自ら情報を集めて患者の状態を捉え、援助を計画・実施する体験は、<カルテ以外の会話などの情報を通して患者に必要な援助や希望を考えたり、個別的な計画に繋げることができる><動画視聴から非言語的情報の重要性を実感した>などの、【カルテ以外の情報が個別的な計画には重要となる】という学びに繋がっていた。更に、会話や動画の情報から看護上必要な情報を選び出すためには、学生自身が情報の持つ意味を考え看護に繋がる意識を持って患者の思いや希望に着目しなければ、情報を得る行動に結びつかない。<自分から情報を得ようと働きかけることにより新たな情報を得ることができ患者理解が深まる

表2 実習プログラムを通して得られた学び

カテゴリー	コード
カルテ以外の情報が個別的な計画には重要となる	カルテ以外の会話などの情報を通して患者に必要な援助や希望を考えたり、個別的な計画に繋げることができる
	動画視聴から非言語的情報の重要性を実感した
患者理解を深めるためには能動的に動く必要がある	自分から情報を得ようと働きかけることにより新たな情報を得ることができ患者理解が深まる
	着目した情報から援助を関連付けて考える必要性やその過程を学んだ
	患者から自分が着目する情報を得るための具体的な質問方法を学べた
変化を追いながらその時々状態を捉え援助を考える必要がある	日々情報の変化を体験したことで患者の状態が日々変化すること実感した
	様々な情報源や変化する情報の中から自分が着目する情報を探して経過を追っていくことを学んだ
	様々な情報源や変化する情報から患者を捉えその人・状況にあった援助を考える必要性がある
今後を予測して観察点や援助を考える必要がある	変化する状況の中で患者の状態を予測・修正しながら回復に向けた援助を考える事を学んだ
	振り返りを通して今後を予測し必要な観察点やケアを考えることにつながった
振り返り評価することの重要性	実施したことで実施内容を振り返り自分の指導計画の不足点について気付けた
	行動計画の修正・変更が必要な項目が学べ計画内容の評価に繋がった
	自分が考えた項目の重要性・根拠に気付けた
個別性に沿った支援を行う看護師の役割や責任	疾患・生活・思いに沿った退院支援を行う際の看護師の役割と責任に気づいた
	疾患・生活・思いに折り合いをつけて退院後生活していく患者の生活を援助することの必要性を学んだ

><着目した情報から援助を関連付けて考える必要性やその過程を学んだ>など、得られた情報と援助の関連を考える中で、情報が持つ意味や自ら情報を得ようとする姿勢の必要性といった情報収集が持つ意味に対する理解を広げ、【患者理解を深めるためには能動的に動く必要がある】という学びに繋がっていた。

(2) 状況変化に応じた援助を導き出すために必要な思考過程の気づき

擬似カルテや動画など複数組み合わせられた情報や、情報が変化していく擬似カルテから情報を収集する体験は、<日々情報の変化を体験したことで患者の状態が日々変化することを実感した>という気づきをきっかけとして、<様々な情報源や変化する情報の中から自分が着目する情報を探して経過を追っていくことを学んだ>という変化する情報の中から看護上必要な情報を追っていくことの必要性を学び、<様々な情報源や変化する情報から患者を捉えその人・状況にあった援助を考える必要がある>という援助にまで思考を巡らせ、【変化を追いながらその時々状態を捉え援助を考える必要がある】という学びに繋がっていた。

また、複数の情報源から日々の変化を捉えつつ援助を考えていく中で、その時々の変化に対応するだけでなく<変化する状況の中で患者の状態を予測・修正しながら回復に向けた援助を考える事を学んだ><振り返りを通して今後を予測し必要な観察点やケアを考えることにつながった>など、【今後を予測して観察点や援助を考える必要がある】という、予測性を持った思考や行動の必要性について学びが広がっていた。

(3) 自ら考えた援助に対する看護的意味づけ

術後3日目・術後6日目の行動計画立案後の振り返り体験は、<行動計画の修正・変更が必要な項目が学べ計画内容の評価に繋がった>という、自分がアセスメントし予測した患者状況や観察点・援助の方向性が適切だったのかという確認の機会となり、患者の状況に合わせて必要となる行動計画の内容を具体的に考える機会となっていた。更に、患者の状況と照らし合わせて計画内容を振り返ったことにより<自分が考えた項目の重要性・根拠に気付けた>という、考えた援助に対する意味づけに繋がっていた。

もう一つの振り返りの機会である“退院指導の実施・評価”の体験からは、<実施したことで実施内容を振り返り自分の指導計画の不足点について気づけた>という学びに繋がっていた。実際に自分が実施した指導に対し模擬患者からの反応を得たことで、より具体的なレベルでの振り返りとなり、不足点を明確にすることに繋がっていた。これらの体験を経て【振り返り評価することの重要性】という、援助の意味付けや適切性といった新たな視点を得る事に繋がっていた。

また、今回の実習では、学生が自らの力で患者にとって必要となる情報を考えながら情報収集をし、患者の状態を捉え、必要な援助を計画・実施していくプロセスを踏むことを重要視しプログラムを構成した。その“自らが選択・判断・実施する体験”を通して、【個別性に沿った支援を行う看護師の役割や責任】という、一般的な看護に留まらず疾患・生活・思いなどの個性をとらえた援助を行う看護師の役割の複雑さとその責任にまで思考を広げ、深い学びに繋がっていた。

V. 考察

今回の実習では、様々な情報源から意図的に必要な情報を探し出す形の情報提示や、経時的に患者情報が追加され状態が変化していくこと、患者の状態をよりイメージしながら援助を考えられるように情報提示を行うこと、学生が自らの計画や看護実践をその都度振り返り評価することを意図的にプログラムに組み入れた。

以下、上記のねらいに焦点をあて、プログラムの評価についての考察を行う。

1. 情報提示方法が学生の学びに与えた影響

1) 多角的な視点から患者を捉え考え続ける力

臨地実習では、学内での演習と比較して情報の量や種類が圧倒的に多く、学生は様々な情報源の中から自らの力で必要な情報を集めアセスメントすることになる。高比良・吉田・片穂野他(2016)によると、実習で手術直後の患者を担当した学生は、観察項目が多く状況の変化に焦り準備をしても漏れが生じたり、合併症と観察項目の繋がりの理解不足や、患者の状態の判断がつかないので説明できないなどの「つながりの理解と判断が難しい」という困難を感じていた。これらの事から、学生は術後の状態を学習してきてはいても、短時間の中で多くの情報を関連づけて即座に判断する事の難しさがあることがわかる。今回の実習では、教員側が情報をコントロールできることを活かし、意図的にアセスメントに関わる情報に焦点をあてられるような教材を提供した。更に、グループワークの際は教員やインストラクターの介入を行うことで術後経過の道筋をつけ、他学生と共有することで必要な情報を多角的な視点から検討し“気づく”よう関わった。これらの体験を通して、術後経過で着目すべき知識と事例の情報を繋げ、情報に含まれる意味に気づきその時々に必要な情報を探そうとしていたと考える。

“気づく”ことは、臨床判断の一つとして位置づけられている。Tanner(2006)による臨床判断モデルでは、臨床判断を4つの段階に分解して説明しており、“気づく”ことはプロセスのはじめの段階として位置づけられている。これは目の前の状況を知覚的に把握する段階とされており、知識を持っていても目の前の現象

が知識と結びつかない場合は、この“気づく”ことを支援することでその先の“解釈”の段階に進んでいくことができるとされ、その重要性について述べられている(三浦・奥, 2020)。

学生達は、多様な情報の中から自分が着目した情報へアクセスできたことや、模擬患者の存在により相互的関わりの機会から情報を得られたことが、看護過程の展開の上で役立っていると感じていた。これらは、実習プログラムを通して必要な情報に“気づく”ことができたからこそ状況を判断し、多様な情報の中のどの情報にアクセスすべきかが明確となり、情報を取捨選択しながら患者状況を解釈することに役立っていたためと考える。この自ら必要な情報を考え解釈していく過程を通して、更に必要となる情報に気づき、擬似カルテからは判断できない患者の体験・生活・思いなど紙面以外の情報を求め、会話や非言語的情報が示す意味を考えたことが【カルテ以外の情報が個別的な計画には重要となる】という学びに繋がったと考える。これらの“気づく”段階から“解釈”の段階へ移行できたことが【患者理解を深めるためには能動的に動く必要がある】という学びに繋がり、情報収集に目的を持ち主体的に行動し患者理解を深めていたと考える。

2) イメージ化の容易さが及ぼす学びへの影響

実習プログラムを通して患者を様々な角度からイメージ化できたことが、個別的な身体状況や生活への影響に関する理解、変化する身体・心理面の理解、自分が捉えた個性を援助や計画に反映させる思考過程の理解を深めることに繋がっていた。以下、頭の中で思い描き具体的像にしていくことを“イメージ化”として述べていく。

(1) 個別的な身体状況や生活面への影響に関する理解の深まり

看護師は様々な患者との関わりを通して、患者の身体や反応、人間性や思いなどを知り、対象者一人ひとりに合わせた個別的な援助の必要性とその実施方法について学んでいく。学生にとって実習がその実践的な学びの第一歩となり、「実習の場でしか体験できない具体的・個別的な経験を学内で学んだ知識、技術、態度と結びつけ、看護活動が展開できるようにすること」を目的に行う(佐藤・宇佐美・青木, 2009)。A大学では3年次後期より本格的な実習が始まる。実習の初期段階にある学生は机上で積み重ねてきた知識はあるが、実際に使うという経験が少ないため、患者の状況をイメージする力が弱い。知識はあっても、患者の身体を実態として感じ身体の内側までイメージすることや、身体の変化や反応、障害による生活への影響にまで思考を広げて知識を応用することが難しい。学生は目に見えない体内の状態を意図的に観察することが困

難であり、術式・麻酔・回復を踏まえた目的を持った観察が不十分であるとの報告がある(矢野・土屋・野末, 2011)。そのため、臨地実習で実際の患者と関わる経験を通して、学生の中で知識を繋ぎ合わせ理解していくが必要になる。

疾患と治療の関連を理解する際にも、正常な身体と疾患により受ける障害をイメージできなくては、現状のアセスメントや観察、合併症や副作用に対する予測性を持った観察や援助に繋がらない。今回手術動画の視聴や術後モデル人形の観察により“実際に見た事”は、どのように身体の内側が切り開かれ、どの部位にドレーンが留置されたのかなど、学生が目にしていない手術中の出来事に関する情報が補われ、患者状況の理解が深まったのではないかと考える。この事により、更に痛みや辛さといった患者の体験を想像することにまで思考を巡らせていったと予測するが、これらの繋がりが学生の思考の中で行われなければ、観察や援助の必要性・重要性の理解に繋がらない。高比良・吉田・片穂野他(2016)は、シミュレーションを用いて実際に見て触れながら演習を行なったことにより、ドレーンや中心静脈カテーテルが挿入された状態を視覚的にイメージ化する事ができ、患者の状態や合併症、観察項目や方法などの理解が促進されていたと報告している。今回の実習においても、「視聴覚教材による身体状況の提示」により術後身体の具体的なイメージができたことが、援助やその必要性を考えることに繋がったと考える。更に、身体イメージ化は生活への影響へと考えを巡らせることに繋がり、疾患・病気が患者に及ぼす影響やその体験をイメージすることに繋がったと考えられ、これらの思考過程が患者体験の理解を深めることに役立っていたと考える。

生活背景や心理面に関して、今回の実習ではあえて擬似カルテ上に詳細な情報を提示しなかった。臨床において個性を捉える際には、コミュニケーションや相互的関わりを通して、人間性や入院前の生活状況について看護の視点で聞き出し捉えていく。学生は一般的な病気を持った人に関する知識や観察・援助に関する知識は持っているが、一人ひとりの生活を知りその人が生活する上で受ける疾患や障害による影響にまで考えを広げることが難しい。従来の実習では、学生は臨地実習で実際の患者と出会い、生活を知る中で疾患や障害による影響について考え、必要な援助が何か思考を巡らせていく。今回はインタビューによる会話や動画視聴を通して患者の生活を知ると共に、患者の不安や心配の言動をきっかけに、疾患や障害が事例患者の生活にどのように影響するのか、考えを巡らせていったと考える。

(2) 変化する身体・心理面の理解と回復に向けた看護援助に関する理解の深まり

更に紙面上の事例とは異なり、臨床では日々患者の状態は変化していく。一時点における観察や援助だけを考え関わるだけでは、健康回復に向けた計画的な看護援助とはならない。身体面だけでなく心理面も同様に、その時々々の病状や状況、残存する障害など様々な要因により影響を受け、日々変化していく。疾患・障害を持ちながら日々生活を営み続ける人間を対象とするということは、日々変化することを踏まえなくてはならないが、紙面上の事例ではこの状況変化を体感することの難しさがある。そこで、日々の身体面・心理面の変化を体感してもらうことをねらいとして、日々の疑似カルテ情報追加や、行動計画立案後の情報追加、術後観察から退院指導までの変化を追いながら複数回に渡り情報を提示し患者の状況を更新していった。これらの「状況が変化する事例展開」において関連した情報が連動しながら更新されたことが、前日との違いや病状経過などの患者状況を考える機会となり、更なる患者状況のイメージ化に役立ったのではないかと考える。また、学生はインタビューや動画により患者の言葉として情報を聞くことで、情報にリアリティを感じていた。情報の変化に加え、リアリティある情報により患者を身近に感じることで実習体験に意識を集中させ、実習に専心できたことが、患者体験の具体的なイメージ化や理解の深まりに役立っていたと考える。

様々な視点でイメージ化が出来たことで、学生は事例患者の術後の状況変化について身体・心理面から細かく捉えながら、その時々々に必要な援助を考えていた。このことが、【変化を追いながらその時々々の状態を捉え援助を考える必要がある】という学びを得ることに繋がっていたと考える。イメージ化できたことが次に必要な情報を追うことに繋がり、変化する情報を追いながら何が必要な援助かを常に考えるという、回復に向けた看護援助のための思考過程を学んでいたと考える。また、現在の状況をイメージ化できたことで、一時点の状況だけでなくその先の未来の状況へイメージを膨らませることに繋がり、【今後を予測して観察点や援助を考える必要がある】という予測の必要性に関する学びに繋がっていたと考える。

以上の通り、今回の実習で重視した患者状況の“イメージ化”促進のためのプログラム構成により、患者の状態を視覚化し患者理解を深めるプログラムを積み上げたことで知識が繋がり、学生の中で具体的なイメージ化が促進されたのではないかと考える。更に情報の多様さや模擬患者との直接的な関わりが学内実習体験に臨場感を生み、学生のモチベーションや実習への専心に繋がったことで、より深いレベルで思考することができたのではないかと考える。

2. 看護実践における内省から得られる学び

今回の実習では、術後3日目・術後6日目の行動計画内容を検討した後と、退院指導計画の実施後に、グループ内で振り返る機会を設けた。これらのプログラムの中で繰り返し振り返りを行うことにより、学生はその都度実施した事を内省し、次の行動を修正するというプロセスをたどっていたと考える。

看護師は状況の中で行為の効果を評価し、必要であれば方法を修正して変更することに“行為の中の省察”を使用しており、省察により実践をその場で絶え間なく改善していくとされている(三浦・奥, 2020)。今回退院指導計画を模擬患者に対して実施した体験は、実施する中で相手の反応や理解度を確認しながら相手に合わせて指導内容を修正する体験と、指導後に自己の指導内容を客観的に振り返り評価する体験が含まれている。相手の反応から自己の援助内容の適切性を評価しつつ、患者の生活に合わせた個別的援助内容に調整していくプロセスの中で、常に内省し実践を改善していく体験となっていたと考える。加えて指導実施直後に学生・教員・模擬患者からのフィードバックを行い、その後個別に実施の評価を行った。これらの振り返りの中で自己と他者の視点の違いに気づき内省が促され、単なる出来高や正誤の振り返りに留まらず、行動計画の適切性や計画に含まれる内容の意味づけといった分析的思考に繋がり、患者にとっての観察・援助の重要性が意識化されたのではないかと考える。

更に学生は一連の実施・評価を通して、疾患だけでなく患者の生活や思いに沿った支援を行うという看護師の役割の深さを認識し、その責任に気づいていた。省察とは、行為のプロセスにおいて看護活動への患者の反応に関心を向ける事であり、看護行為とアウトカムの関連付けを行うことで看護行為を評価することに繋がり、成果を念頭においた責任のある実践を目指すことができるとされている(三浦・奥, 2020)。実習プログラムを通して内省を繰り返したことにより、学生が自己の看護を評価し看護師としての責任を持つことの重要性に気づくことに繋がったと考える。

以上のように、複数回の振り返りの中で内省を繰り返したことにより思考が深まり、【振り返り評価することの重要性】という学びに繋がったと考える。岡田(2020)によると学生の内省は一場面の体験や一領域の実習体験のみに留まらず、様々な実習体験の中で内省し得た学びを統合した振り返りを行っており、この中で感情や自己の考え方の傾向も含めて省察することが学生の思考プロセスを促進していたとしている。この報告の中では、“内省を繰り返す”ことが学生を患者中心の思考に転換していくことや、“内省を繰り返す”ことで必要な観察を見出す考え方の理解を深めたり、患者状況を解釈し想像する力をつけることに繋がり、結果として援助を見出す考え方や患者把握のスキ

ルを上げることに繋がっていたとされている。更に“内省を繰り返す”ことは、自分の努力すべき方向を見出すことにも繋がっていた。このように、実践を積み重ね内省を繰り返すことにより、患者に必要なアプローチを考える時に基盤となる思考方法を、学生自身の中で行うことを習慣化していくことが明らかになっている。つまり内省を繰り返すという習慣を獲得することも、学生の思考を促進するために重要であると考え、学生が振り返り内省することの重要性に気づくことは内省の習慣化に繋がり、内省する経験を積み重ねていくことができれば、今後の実習や臨床においても思考を促進し深め続けることができるのではないかと考える。

VI. 研究の限界と今後の課題

今回の研究対象者は、学内代替実習に変更した学生17名のうちの8名であった。そのため、一部学生における学びを表したものであり、学生の主観からの評価であるため、客観的な実習の評価とはならない。

実習プログラムの継続的な評価・改善については今後のCOVID-19流行状況により左右されるため、同じ状況下での検証はできない。しかし今回の実習プログラムで重視した患者状況の“イメージ化”促進については、知識の繋がりや臨場感による学生のモチベーションに繋がり、結果として実習への専心に繋がりより深いレベルでの考察に繋がる可能性が示唆された。また振り返りの繰り返しは内省の重要性の意識づけとなり、内省の習慣化に繋がる可能性についても示唆された。これらの教授方法の工夫について実習を通じた評価はできないが、学内演習に取り入れることで学生のモチベーションや学習効果の向上に繋がるのではないかと考え、今後の課題としたい。

VII. 結論

学内代替実習プログラムの工夫の結果、プログラムは以下の点で学生の学びに役立ち、新たな学びを得ることに繋がっていた。

- 以下の点において、学内代替実習プログラムは学生の学びに役立っていた。
 - ・【情報の多様さ】や【模擬患者存在】など多角的な視点で得られる情報の分析・解釈
 - ・【多角的な視点からの視聴覚教材】や【プログラムを積み上げ】による患者のイメージ化の容易さ
 - ・【看護過程の展開に則った実習プログラム展開】により一連の思考過程を辿れたこと
 - ・【自身の計画・実施に基づいた振り返り】を繰り返したこと
- 以下の点について、学生は学びを得ていた。
 - ・【カルテ以外の情報が個別的な計画には重要となる】【患者理解を深めるためには能動的に動き情

報を得る必要がある】という、情報や情報収集が持つ意味に対する理解の広がり

- ・【変化を追いながらその時々の状態を捉え援助を考える必要がある】【今後を予測して観察点や援助を考える必要がある】という、状況変化に応じた援助を導き出すために必要な思考過程の気づき
- ・【振り返り評価することの重要性】【個別性に沿った支援を行う看護師の役割や責任】という、自ら考えた援助に対する看護的意味づけ

謝辞

本研究を実施するにあたり、ご協力いただきました対象者の皆様ならびに関係者の皆様に心より御礼を申し上げます。

本研究に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

文献

- 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 (2020). 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第二次報告 看護学実習ガイドライン. https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt_igaku-000006272_1.pdf (2021/11/10).
- 伊藤加奈子, 熊谷歌織, 唐津ふさ (2021). COVID-19 流行下における成人看護学実習 I プログラム—学内代替実習の実践報告—. 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 28, 57-65.
- 三浦友理子, 奥 裕美 (2020). 臨床判断ティーチングメソッド. p 30-36, 50-54, 102, 医学書院, 東京.
- 日本看護系大学協議会 (2020). 新型コロナウイルス感染拡大の影響により臨地実習に影響を受けた令和3年度新人看護職の研修の支援に関する要望書. <https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/08/youbousyo-MHLW20200825.pdf> (2021/11/10).
- 岡田摩理 (2020). 領域別看護学実習の経験の積み重ねにより臨床判断に必要な思考方法を学生が獲得していくプロセス. 日本看護学教育学会誌, 29(3), 1-13.
- 佐藤みつ子, 宇佐美千恵子, 青木康子 (2009). 看護教育における授業設計. p 100, 医学書院, 東京.
- 高比良祥子, 吉田恵理子, 片穂野邦子, 松本幸子, 山田貴子 (2016). 看護学生が抱く手術直後患者の観察における困難感と対処. 日本看護研究学会雑誌, 39(4), 115-124.
- Tanner, Christine A. (2006). Thinking like a nurse: A research-based model of clinical judgment in nursing. The Journal of nursing education, 45(6), 201-211.
- 矢野朋実, 土屋八千代, 野末明希 (2011). 手術直後の患者の観察演習における学生の傾向と演習方法の検討. 南九州看護研究誌, 9(1), 47-54.

受付：2021年11月30日

受理：2022年1月14日